鳥取の民話

収録・解説　酒井董美（ただよし）

17

雨降ると鳴く蛙の習性昔話に

雨蛙不幸

（東伯郡三朝町大谷）

語り手　山口忠光さん（明治40年生まれ）昭和63年8月19日収録

あらすじ

昔、雨蛙（あまがえる）がおった。親が「山へ行け」と言えば川へ行くし、「川へ行け」って言うと山へ行くし、何でも反対ばっかりしていた。

そうしていたら、親が死ぬときに「おれが死んだら、川の縁（へり）へ埋けてごせえよ」と言ったら、子ども蛙が「うん」て言ったけど本当に「親が死んだら、お母さんが生きとる間に、反対ばっかりしたけえ、今度は本当にお母さんの言う通りしてあげにゃあいけん」と言って、川の縁へ埋けた。

そうしたら雨が降るたんびに「お母さんが流れりゃせんか」と言ってガイガイガイガイ鳴くそうな。

それが死んでしまってからのことだから、後の祭りで何にもならなかったって。昔こっぽり。

※「あらすじ」欄に記しておいたが、今回は山口さんの語りほぼそのままである。話そのものが少量なので、決められたスペースを埋めるために、強い方言などを修正しただけで紹介したものであることをご了解いただきたい。

解説

蛙が雨が降ると鳴く習性を昔話にしたもので、各地で語られている。関敬吾『日本昔話大成』の話型で見ると、動物昔話の「小鳥前生」の中にある「鳶不幸（とび）」に相当する。以下にそれを紹介しておこう。

①鳶（山鳥・閑古鳥（かんこどり）・梟（ふくろう）・雨蛙）はいつも親の言葉に逆らう。

②親は山に葬ってもらいたいので、川辺に埋めてくれと遺言する。

③鳶は後悔して遺言どおり川辺に埋めるが、雨降り前になると墓が流れるのを恐れて鳴く。

さて、語り手の山口忠光さんのことに触れておく。

山口さんをお訪ねしたのは、昭和63年の夏のこと。ちょうどその頃、米子工業高等専門学校が坂田友宏教授（当時）指導の下、天神川流域の民俗を調査していた。私も調査員の一人で、口承文芸一般を担当していた。そして語り手を捜して回ったときにお会いしたのが山口さんであった。男性の語りというものは、やや荒いことが多いのが普通だが、この山口さんは違っていた。明るく豪放な話しぶりでいて、実にキメが細かいのである。この連載の中でも数話紹介するが、いずれもそのことは言える。

聞けば青年時代、積雪が多かったおり、集落内の児童のいる家庭を訪問して、昔話を語って喜ばれていたという。そのような経験が自然に山口さんをみごとな語り手に育て上げていたのであろう。うかがえばまだまだ多くの話をご存じだったはず。今ももっとうかがうべきだったと惜しい気持ちがしているのである。

（元鳥取短期大学教授）

（水曜日に掲載）

イラスト・福本隆男

鳥取県立博物館HP「鳥取の民話」コーナーで語り手の音声が聴けます。